

第十章 スイス・マッターホルン

一 ツェルマット

ツェルマットは、マッターホルンへのアクセスの町として有名である。フィスプ（VISP）まで行き、乗り換えてツェルマットの町に着いた（五月二十九日の午後）。この町は、自動車の乗り入れが禁止されており、馬車が走っていた。また、山小屋風のきれいな建物が並んでおり、これまでの大都市とは雰囲気まったく違っていた。早速、宿を捜した。少し高かったがこじんまりしたきれいな部屋を紹介してもらった。ずっと、石材を使った建物ばかりであったので、木材を使った山小屋風の建物からなるこの町は、心地が良かった。



ツェルマット

1 山小屋風の建物といえば、バンクーバー近郊のウイスラーが思い出される。冬季オリンピック開催で有名だが、一九九八年の秋にバンクーバーから日帰りで旅行した。山小屋風のホテルなどが立派だったが、それと比べるとツェルマットの建物はこじんまりしていた印象がある。

二 マッターホルン



ツェルマット (1620m) とマッターホルン (4478m)
(当時入手したパンフを参考)



マッターホルン (山頂が見えにくい)



マッターホルン (こちらも見えにくい)

町中からも、マッターホルンが見え隠れし感激した。マッターホルンを間近に見るためには、登山列車を利用してゴールナーグラート展望台へ行けば良いとのことであった。しかし、切符の値段が高く断念した。その代わり、町中から少し高台まで歩いて行けば展望が良さそうな場所があると思われたので一人で高台を目指した。登山ではなく軽いハイキング程度のものであり、危険はまったくなくと判断した。丘を目指して登って行くと、誰もいない丘にたどり着き、素晴らしい眺望のきく場所を見つけた。記念写真を撮った。

アルジェ訪問でも達成感を感じたが、マッターホルンが一望できる場所まで来て、この旅行の達成感をまた感じた。立派な建造物、街並みのたたずまい、有名な美術品などの人工物もヨーロッパならではのと思われたが、アルプスのやまなみはヨーロッパを代表している景観と思う。

その後、ユングフラウへの基地があるインターラーケンも訪れたが、天候が良いとは思われなかったこと、やはり登山鉄道は相当に高かったことから、乗るのはあきらめた。今思えば、無理をしても登山列車に乗るべきであったと思う。スイスでは、これまでの都市部から離れ、自然に触れることができたので、都市部とは異なる新鮮さを感じた。

他の人も同じと思うが、アルプスなどの険しい山岳の景観には「何故か」惹かれる。「何故か」を追及してみたいと思うが話が難しくなりそうである。マッターホルン以外の山を少し思い出すと、ニュージーランドのマウントクック——この時はセスナ機で河にも着陸した。イラン最高峰ダマバンド山——この時はテヘランからカスピ海へと向かう車から眺めた。ウイスラーから望んだやまなみ——この時は雪上車に乗って氷河近くまで行つた。その他、九州でも由布岳、久住連山、屋久島のモッチヨム岳など素晴らしい景観はいつも胸を高鳴らせてくれる。

次は、山を抜けアムステルダムだ。



インターラーケンの近く



インターラーケンの近く